



Title	相互独立的自己観・協調的自己観が社会的手抜きに及ぼす影響
Author(s)	阿形, 亜子; 釘原, 直樹
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 71-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11693
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

相互独立的自己観・協調的自己観が社会的手抜きに及ぼす影響¹⁾

阿形亜子(大阪大学大学院人間科学研究科)

釘原直樹(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究は、文化によって、その強弱に違いがあるといわれる自己概念である、相互独立的自己観と協調的自己観(Markus & Kitayama, 1991)が社会的手抜きに及ぼす影響を実験的に検証した。相互独立的自己観を持つ人は、自己の個人的属性を高めることを志向するため、達成場面においては自らの能力を評価・確認するように特に動機づけられる。一方、相互協調的自己観を持つ人は、当該の対人関係の規範や価値観に自らが適合するか否かを考慮し、実際に望ましくないと認識した場合に、修正の努力を試みる。このことから、相互協調的自己観が優勢な場合には社会的手抜きは生じないと予測される。実験の結果、仮説は支持され、相互独立的自己観が優勢な群では社会的手抜きが生じたが、相互協調的自己観が優勢な群では社会的手抜きは生じなかった。最後に、得られた知見に基づき、今後の研究展望と現実場面での応用が議論された。

キーワード: 社会的手抜き、相互独立・協調的自己観、集団パフォーマンス、日本文化

問題

社会的手抜きとは、個人で作業するときよりも集団で作業する場合に作業量が低下する現象(Latané, Williams, & Harkins, 1979)であり、Kerr & Bruhn(1983)は、特に自分の作業量が評価されない状況でのパフォーマンスの低下として定義している。

社会的手抜きの原因は、個人ごとの作業量の識別・評価可能性の有無であることが明らかとされており(Latané et al., 1979)、個人ごとの作業量が識別されている状況に比べて、個人ごとの作業量が識別されず、作業量が集団全体で合算される状況で社会的手抜きが生じる。

一般的に、集団成果に目標が伴う場合や(小窪, 1998)、集団成果のフィードバックが与えられ、集団の能力水準が確認できる場合(Harkins & Szymanski, 1989)など、集団評価が重要となる状況では消失することが明らかとなっている。

社会的手抜きと文化差

Gabrenya, Wang, & Latané(1985)の中国人留学生を対象にした実験では、社会的手抜きはおこらなかったことから、集団志向の東洋地域ではそれが生じせず、個人主義の西洋地域のみ生じるといふ、文化的影響が指摘されてきた。しかし、高田・櫻坂(1997)は、個人主義と集団主義の妥当性に疑問を呈している。また Nisbett(2003)は西洋人と比べて、中国人と日本人は社会的制約の多さの点では共通しているものの、権威により制約を受けるのが中国人であり、仲間からの制約を受けるのが日本人であると述べており、日本と中国の違いについて言及している。我が国では、Kugihara(1999)、小窪(1996, 1998, 2005)、池上・小城(2005)などにより、社会的手抜きが確認されており、社会的手抜きが生じる結果が優勢である。一方で、白樫・Latané(1982)の大

学生を対象にした研究では、社会的手抜きは生じなかった。しかし、同時期におこなわれた川名・Williams・Latané(1982)の中学生を対象とした研究では社会的手抜きが生起している。これらの異なる結果について、白樫(1984, 1986)は、中学生と大学生の間での個人主義の程度の違いを示唆し、社会的手抜きを左右するパーソナリティを検討することの必要性を指摘している。

これまで、我が国と他国の文化差については多くの議論がなされ(土居, 1971; 北山, 1998; Nisbett, 2003; 高田・櫻坂, 1997)、文化差が社会的手抜きの生起を左右することが示唆されてきたものの、それらがどのような心理プロセスを経て影響するのかについては、これまで検討されてこなかった。そこで本研究では、相互独立・協調的自己観(Markus & Kitayama, 1991)という文化的に共有された自己観が社会的手抜きに与える影響について実験をおこない、社会的手抜きの文化差を生み出す心理的プロセスについて検討した。

相互独立・協調的自己観

相互独立・協調的自己観とは、文化心理学の立場から、文化によりその強弱に違いがある自己として Markus & Kitayama(1991)により区別された自己観である。西洋と東洋は、個性と関係の維持のどちらを重視するのか、規則を普遍的なものとして捉えるのか、文脈により変化する局所的なものだと捉えるかなどの点で対照される(Nisbett, 2003)。文化心理学では、心と文化は相互に影響・規定しあう関係であるとし、心理的プロセスそのものが文化によって異なるという立場をとる。そのため、西洋と東洋でみられる心理学的知見の不一致は、実験刺激の意味そのものが文化によって異なる可能性を指摘している(北山, 1998; Nisbett, 2003)。これにより、相互独立的自己観を持つ個人と、相互協調的自己観を持つ個人では、社会的手抜きの主要な原因である、識別・評価可

能性そのものの価値が異なる可能性が示唆される。

相互独立的自己観(*independent construal of self*)は、西洋文化において共有されている自己観であり、自己は他者や周囲のものとは区別された実体であると理解されているため、主体の能力や性格や才能などの個人的属性により定義される。一般的に西洋人は、他者と異なる個性を望み、対人関係は個人的な成功を阻むこともあるという信念を持っており、対人関係よりも個人的な成功を重視する(Nisbett, 2003)。このように、相互独立的自己観においては、独立した考えや生き方を持ち、表現することが文化的に認められた人間像である(北山, 1998)。

一方、相互協動的自己観(*interdependent construal of self*)は、東洋文化において共有されている自己観であり、自己を社会的ユニットの構成要素の一部として、関係志向的な実体とらえている。つまり、自己の定義は状況やその場の他者によって異なる。そのような自己観が共有されている東洋において、文化的に認められた人間像は、自らを意味のある社会関係の重要な一部分として認識し、周囲の人にもそれを認識されることで獲得される(北山, 1998)。集団目標と協動的な行動に関心が高く、対人関係の維持が主要な目標であり、個人の成功よりも重視される(Nisbett, 2003)。高田(1999)の調査では、日本人青年の相互協動的自己観は、オーストラリアとカナダ人青年に比べて高いことが明らかとなっている。日本では、自己呈示行動(長谷川, 2005)や自己査定行動(清家・高田, 1997)、宗教(長岡, 2006)、育児ストレス(藤崎・今井, 2007)などにおいて相互協動的自己観との関連が検討されている。

このように相互独立・協動的自己観は、西洋・東洋それぞれの文化に共有された自己観として提出されたが、木内(1995)や高田(1999)は、これらの自己観の両方が個人内に形成されていると考え、自己概念内における相対的な優劣性が社会的行動の個人差を生じさせると主張しており、同一文化内での研究をおこなっている。この主張は、戦後西洋文化が急激に浸透した歴史的背景を持ち、東洋文化と西洋文化が共存している日本において特に支持されうると考えられる。Nisbett(2003)も、相互協動的自己観と相互独立的自己観は二者択一ではなく、簡単なプライミングによっても変化しうると述べており、周囲の環境によって日々変化するものと思われる。北山(1998)もまた同一文化内の個人差は認めており、共有されている自己観に対して反逆する場合もあり、むしろそれにより文化が再構成されると述べている。近年では、相互協動的自己観の優勢な人は、他者を意識する状況で自己査定行動を抑制する(清家・高田, 1997)ことや、自己呈示の際、それをおこなう他者との関係性によって、異なった自己イメージを示そうとすること(長谷川, 2005)、

などが明らかとなっている。東洋・西洋両方の文化が混在する日本における相互独立・協動的自己観と社会行動を解明することは、重要な課題である。

社会的手抜きと相互独立・協動的自己観

北山(1998)は、文化的に共有された自己観は、その文化の行動パターンに反映されると指摘している。

相互独立的自己観を持つ欧米人は、自己の個人的属性を高めることを志向するので、課題達成場面においては自らの能力を評価・確認するように特に動機づけられる。一方、相互協動的自己観を持つ東洋では、個人の目標を個性の希求や他者よりも優れた能力獲得に置くのではなく、対人関係の調和や、集団での役割や義務を果たすこと(Nisbett, 2003)、対人関係の規範に適合した目標に向けて努力することに置く。また、特に日本人は、当該の社会の規範や価値観に自らが適合するか否かを特に考慮し、その結果、望ましくないと認識した場合には、その修正を試みることで自己実現を達成する(北山, 1998)。このことから相互協動的自己観が優勢な場合には、必ずしも個別評価により望ましい自己が確認できるとは限らない。一方、自らの作業量により、能力が評価されることは、相互独立的自己観が優勢な個人には重要であり、動機づけを高めることが予測される。

仮説 相互独立的自己観が優勢な場合のみ、社会的手抜きが生起する。

方法

実験参加者

実験参加者は、学部生 54 名(男性 40 名、女性 14 名)であった。平均年齢は、男性 18.65 歳($SD = .77$)、女性 18.29 歳($SD = .47$)であった。

実験条件

実験条件として、集合要因(個人条件 vs. 集合条件の 2 水準)を設定した。また、実験後の質問紙の回答から、相互協動的自己観(高群 vs. 低群)を設けた。

質問紙

相互独立・協動的自己観尺度 相互独立・協動的自己観尺度は、木内(1995)により作成された。その尺度は合計得点が高いほど、より相互協動的自己観が優勢であることを示し、「協調性を尊重する」や「自分の意見を主張する」などの項目で構成されている。回答は 4 件法でおこなった。

課題や実験事態の評価に関する項目 実験者からの評価懸念、動機づけ、自分の作業量についての懸念、成績の重要性、課題の面白さを測定するために、小窪(1996)が用いた尺度を参考にして 5 項目を作成した。回答は 7 件法でおこなった。

対人魅力尺度 対人魅力尺度(林, 1978)は、他者のパ

一ソナリティを認知するときに用いる判断の枠組みについて、3つの基本的次元に分けて整理し、尺度を構成したものである。例えば、実験協力者の印象を調べるため、個人的親しみやすさ次元から「明るい—暗い」、社会的望ましさ次元から「まじめな—ふまじめな」を用いた。また、好意度と信頼度についての2項目を作成・追加した。回答は7件法でおこなった。

実験課題

実験課題として、色鉛筆12色セットの組み立てを用いた。色鉛筆は色別に机の上のトレイに置いた。実験参加者は、トレイから全ての色を1本ずつ取り出し、ビニールの袋に詰め、袋に封をした。

実験協力者

本実験における実験協力者は、女性3名(平均年齢23歳)であった。実験中の服装は、白いシャツと黒いズボンとした。

手続き

実験は、服装の影響を統制するため、白衣とスニーカーを着用した実験者1名と、白いシャツ黒いズボンを着用した実験協力者3名のうち1名によっておこなった。実験者・実験協力者ともに女性であった。

実験は、実験参加のために待機中の実験参加者に、実験協力者が実験とは関係のない作業(途上国への援助品のパッケージ作業)を依頼するという状況設定のもとでおこなわれた。このような操作をおこなったのは、作業パフォーマンスを主要な従属変数としたためである。

実験場所に到着した実験参加者は、実験者に廊下で待つように指示された。2分後、事務員に扮した実験協力者が現れ、実験参加者に「実験を待っている間に別室でおこなっている作業を手伝っていただけませんか」と声をかけ作業への協力を要請した。実験参加者が作業に協力することに同意した後、実験協力者が実験参加者を隣室へ誘導、入室させた。そこには、実験設定に信憑性を持たせるため、「総合学術博物館作業部資料室」と偽の室名が書かれていた。入室後、入室名簿に名前と日付を記入させた。

集合要因については下記のように操作した。個人条件では、実験室入室の際の名簿は白紙であり、完成した課題を入れる袋にはなにも入っていない状態であった。よって実験協力者は、容易に実験参加者の名前と作業量を確認できた。集合条件では、入室の際の名簿にはあらかじめ5名の名前が書かれてあった。また、完成した課題を入れる袋には、作業量が実験協力者に知られないと実験参加者に思わせるため、あらかじめ62個の完成品が入っていた。

入室名簿への記入後、実験参加者は作業台の前の椅子に座るよう誘導された。実験協力者は、実験参加者と

机を挟んだ向かいに着席し、作業の説明をおこなった後、1つ作ってみせた。作業は、鉛筆が12色の色別に分けられているトレイから、全ての色を1本ずつ取り出してビニール袋に詰め、鉛筆セットを完成させることであり、完成品は、机の横に取り付けてある袋に入れるよう教示した。

作業の説明後、実験室に控えていた実験者が実験協力者の携帯電話を鳴らした。その電話に出た後、実験協力者は実験参加者を残して退室した。15分後、実験者が入室し、作業の終了を告げ、別スペースにて実験後の質問紙への回答を要請した。質問紙への回答が終わると、実験が終了したことを伝え、デブリーフィングをおこない、実験を終了した。

結果

作業量と相互独立・協調的自己観の相関関係

作業量と相互独立・協調的自己観尺度について、ピアソンの積率相関係数を求めたところ、有意な相関関係はみられなかった($r = .00, ns$)。

操作チェック

実験参加者の評価懸念を確認するため、評価懸念項目「自分の作業量をあとで他の人に知られると思いましたか」について、 t 検定をおこなった。その結果、集合条件($M = 2.61$)よりも個人条件($M = 4.85$)の方が、自分の作業量が他者に知られると認識していた($t(52) = 4.03, p < .01$)。また課題の面白さ(7件法)については、平均4.72($SD = 1.60$)であり、比較的面白い課題であると認識されていた。

実験協力者の影響

対人魅力尺度について Cronbach の α 係数を算出したところ $\alpha = .78$ であった。実験協力者間で対人魅力に差があるかどうかを確認するため、各項目得点について1要因分散分析をおこなった。その結果、好意度($F(2, 51) = 2.40, ns$)、信頼度($F(2, 51) = 1.13, ns$)、明るさ($F(2, 51) = 2.16, ns$)、まじめさ($F(2, 51) = 0.53, ns$)、いずれの得点にも差はみられなかった。

相互独立・協調的自己観高低と集合要因がパフォーマンスに与える効果についての分析

実験参加者が作成した課題は、全体で平均13.59個($SD = 3.59$)であった。

相互独立・相互協調的自己観尺度の合計変数を作成するため、尺度の項目得点から Cronbach の α 係数を算出した。その結果、 $\alpha = .82$ と、高い α 係数であったため、全尺度項目の合計得点を指標とした。全体の平均値は37.11($SD = 7.00$)であった。

相互独立・協調的自己観の合計得点が平均値($M = 37.11$)以上の実験参加者を高群($M = 42.25, SD = 4.73$)、平均値以下の実験参加者を低群($M = 31.58, SD$

= 4.26)とし、集合要因(個人・集合)と相互協調的自己観(高群・低群)による 2 要因の分散分析をおこなった (Figure 1)。実験条件別での実験参加者数は、相互協調的自己観高・個人条件 12 名、相互協調的自己観高・集合条件 10 名、相互協調的自己観低・個人条件 16 名、相互協調的自己観低・集合条件 10 名であった。分析の結果、集合条件の主効果 ($F(1, 53) = 4.86, p < .05$)と、交互作用 ($F(1, 53) = 4.10, p < .05$)が有意であった。そこで、相互協調的自己観高低の単純主効果を検討したところ、個人条件 ($F(1, 53) = 1.71, ns$)、集合条件 ($F(1, 53) = 2.44, ns$)ともに非有意であった。集合要因の単純主効果は、相互協調的自己観低群において有意であり ($F(1, 53) = 9.46, p < .01$)、個人条件 ($M = 15.31$)よりも集合条件 ($M = 11.50$)の作業量が少なかった。相互協調的自己観高群では、有意な差は見出されなかった ($F(1, 53) = .02, ns$)。

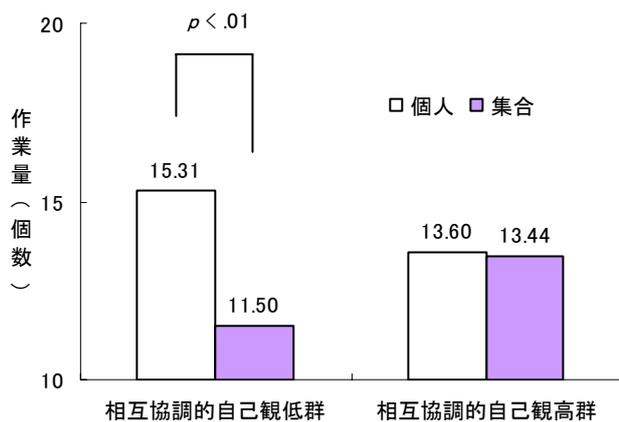


Figure 1 相互協調的自己観高低と集合要因別作業量の平均値

自己報告による動機づけについての分析

作業中の動機づけに関する質問項目である「あなたは今日の作業を一生懸命やりましたか」への回答について、集合要因(個人・集合)と相互協調的自己観(高群・低群)による 2 要因の分散分析をおこなった。

その結果、相互協調的自己観の主効果のみ有意傾向がみられ ($F(1, 53) = 2.94, p < .10$)、高群 ($M = 5.79$)よりも低群 ($M = 6.35$)において動機づけが高いことが明らかとなった。

成績の重要性認知についての分析

作業成績の重要性に関する質問項目である「今日の作業でよい成績をあげることは重要であると感じましたか」についても、同様の分析をおこなった。その結果、相

互協調的自己観の主効果が有意であり ($F(1, 53) = 5.51, p < .05$)、高群 ($M = 3.82$)よりも低群 ($M = 4.88$)の方が、よい成績をあげることは重要であると報告した。

作業量についての懸念に関する分析

自分の作業量への懸念に関する質問項目である「自分の作業量が気になりましたか」についても、同様の分析をおこなった。その結果、相互協調的自己観の主効果のみ有意であり ($F(1, 53) = 7.60, p < .01$)、高群 ($M = 3.43$)よりも低群 ($M = 4.88$)において、自分の作業量が気になったと報告していた。

考察

実験の結果、相互独立的自己観が優勢な相互協調的自己観低群では、個人条件よりも集合条件の作業量が少なく、社会的な手抜きが生じた。一方で、相互協調的自己観が優勢な相互協調的自己観高群では、個人条件と集合条件間に有意差はなく、同程度の作業量であった。これにより、「相互独立的自己観が優勢な場合のみ、社会的な手抜きが生起する」という仮説は支持された。

これまで、文化的自己観の違いによって、動機づけそのものの形態が異なることが文化心理学の立場から指摘されてきた(北山, 1998)。西洋で共有されている相互独立的自己観を持つ場合は、望ましい自己の獲得のために、自己の個人的属性を高めるように動機づけられ、東洋で共有されている相互協調的自己観を持つ場合は、社会的に与えられた目標や、規範、社会関係で共有された価値観への適合に向けて動機づけられる傾向にあると考えられてきた(北山, 1998)。個人ごとの成績評価は、相互独立的自己観が優勢な自己にとって、望みしさを獲得する重要な方略であるため、その有無により動機づけは大きく左右されたと考えられる。良い成績をあげることの重要性評価や、自分の作業量に対する懸念はともに、相互独立的自己観が優勢である群の方が高かった。

一方、相互協調的自己観が優勢である群では、条件に関わらず、作業量は一定であった。これは、相互協調的自己観を持つ自己にとっては、個人ごとの評価は望ましい自己の獲得に影響せず、動機づけを高める要因とはならないためであると考えられる。

これまで、個人ごとの作業量の識別・評価可能性は社会的な手抜きの主要な原因といわれてきた(Latané et al., 1979)。しかし本研究によって、自己観のようなパーソナリティ変数が、社会的な手抜きに影響することが明らかになった。Gabrenya et al.(1985)によって、中国人に社会的な手抜きがみられないという結果が得られて以降、文化による社会的な手抜きの違いが指摘されてきたが(白樫, 1986; 池上・小城, 2005)、これら文化の影響は、その文化に優勢な自己観から生じている可能性を本研究の結

果は示唆している。本研究では、相互独立・協調的自己観を一次元でとらえた木内(1995)の尺度を使用した。両者を独立した概念であるとした高田・大本・清家(1996)の尺度を用いた検討も必要であろう。

実社会への応用としては、集団でのパフォーマンスを高めるには、相互独立的自己観の優勢な人と相互協調的自己観の優勢な人とは、異なったアプローチをする必要性が指摘される。例えば、相互独立的自己観が優勢な人に対しては、集団全体で評価するよりも、個人の仕事の成果によって評価される欧米的成果主義を採用するほうが効率的であると考えられる。一方、相互協調的自己観が優勢な人に対しては、個人の成果によって評価される状況と比べて、集団全体で評価されても動機付けは維持されるため、個別の成果が判別できず集団成果でしか評価できない作業に適していると考えられる。

また本研究は、木内(1995)による、相互独立・協調的自己観の相対的な優位性が社会的行動の個人差を生じさせるとの主張を裏付けた。本実験の実験参加者の相互独立・協調的自己観尺度の平均値は 37.11 であった。この値を、木内(1996)が調査した欧米在住経験のある大学生や、一般の大学生の値と比較すると、欧米在住経験のある大学生 ($M = 36.02$)と同程度の値であり、当時の一般の大学生 ($M = 41.81$)よりも低い値である。したがって、この約 10 年間に、日本の文化的自己観がより欧米の方向に変化している可能性が指摘される。

心と文化は相互に影響・規定しあう関係であり、文化に優勢な自己観が社会行動を生み出し、またそれが社会を変化させていくこともある(北山, 1998)。文化的自己観と社会行動の関係について分析することは、ミクロレベルとマクロレベルの両レベルで社会を捉えることにも繋がり、今後の更なる検討が望まれる。

引用文献

- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 藤崎真知代・今井洋一 (2007). 母親の育児ストレスと文化的自己観・子育てで完全主義との関連 日本教育心理学学会総会発表論文集, 49, 212.
- Gabrenya, W. K., Wang, Y., & Latané, B. (1985). Social loafing on an optimizing task: Cross-cultural differences among Chinese and Americans. *Journal of Cross Cultural Psychology*, 16, 223-242.
- Harkins, S., & Szymanski, K. (1989). Social loafing and group evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 934-941.
- 長谷川直宏 (2005). 自己呈示行動における文化的自己観の影響 社会心理学研究, 21, 44-52.
- 林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本的次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.
- 池上貴美子・小城幸子 (2005). 社会的な手抜きに及ぼす課題への動機づけの影響 金沢大学教育学部紀要教育科学編, 54, 55-69.
- 川名好裕・Williams, K.・Latané, B. (1982). 社会的怠惰

- 効果 Social loafing effect —日本の中学生での場合— 日本心理学会大会第 46 回大会発表論文集, 428.
- Kerr, N. L., & Bruun, S. E. (1983). Dispensability of member effort and group motivation losses: Free-rider effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 78-94.
- 北山 忍 (1998). 自己と感情 —文化心理学による問いかけ— 日本認知科学会(編) 認知科学モノグラフ 共立出版
- 木内亜紀 (1995). 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- 木内亜紀 (1996). 独立・相互依存的自己理解 —文化的影響、およびパーソナリティ特性との関連— 心理学研究, 4, 308-313.
- 小窪輝吉 (1996). パフォーマンスへの内的誘因が社会的な手抜きに及ぼす効果 実験社会心理学研究, 36, 12-19.
- 小窪輝吉 (1998). 社会的な手抜きに及ぼす目標設定の効果 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 101.
- 小窪輝吉 (2005). 相互作用集団における社会的な手抜きに関する実験室研究 福祉社会学部論集, 23, 1-9.
- Kugihara, N. (1999). Gender and social loafing in Japan. *Journal of Social Psychology*, 139, 516-526.
- Latané, B., Williams, K., & Harkins, S. (1979). Many hands make light the work: The causes and consequences of social loafing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 822-832.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 長岡岳澄 (2006). 真宗伝道に関する一考察 —文化的自己観に基づく実証的研究— 宗教研究, 79, 1192-1193.
- Nisbett, R. E. (2003). *The geography of thought: How Asians and Westerners think differently ... and why*. London: Nicholas Brealey. (村本由紀子(訳) (2004). 木を見る西洋人森を見る東洋人 —思考の違いはいかにして生まれるか— ダイヤモンド社)
- 清家美紀・高田利武 (1997). 文化的自己観と自己査定行動 —日本文化における検討— 社会心理学研究, 13, 23-32.
- 白樫三四郎 (1984). 社会的な手抜きの比較文化的研究 西南学院大学商学論集, 31, 19-39.
- 白樫三四郎 (1986). だれが集団の中で怠けるか —社会的な手抜きと内的・外的統制傾向— 鳴門教育大学研究紀要, 人文・社会科学編, 1, 83-99.
- 白樫三四郎・Latané, B. (1982). 社会的怠慢に関する実験的研究 日本心理学会大会第 46 回大会発表論文集, 428.
- 高田利武 (1999). 日常事態における社会的比較と文化的自己観 —横断資料による発達の検討— 実験社会心理学研究, 39, 1-15.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996). 相互独立的・相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.
- 高野陽太郎・櫻坂英子 (1997). "日本人の集団主義"と"アメリカ人の個人主義" —通説の再検討— 心理学研究, 68, 312-327.

註

- 1) 本論文は、第一著者の卒業論文(平成 18 年度大阪大学人間科学部)の一部に加筆・修正をおこなったものである。

The effects of independent and interdependent construal of self on social loafing

Ako AGATA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Naoki KUGIHARA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The purpose of this study was to investigate the effects of independent construal of self and interdependent construal of self (Markus & Kitayama, 1991) on social loafing. People who have independent construal of self that was common feature in the westerner tend to enhance personal attribute. Therefore, they are especially motivated to evaluate or confirm their ability in achievement situations. On the other hand, people who have interdependent construal of self that was prominent in the East Asia have a propensity to concern their social rule or values, so they do not try to enhance their performance in the achievement situation. The results showed that social loafing occurred in the groups of participants who have the independent construal of self but not occurred in the groups of participants who have the interdependent construal of self. The perspective of social loafing study and the applicability to the real world were discussed.

Keywords: social loafing, independent-interdependent construal of self, group performance, Japanese culture.